

令和 6 年度 【 学園研究費助成金＜ A ＞ 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

リガナ
氏 名 マスダ リョウタ
舩田 亮太

研究期間 令和 6 年度

研究課題名 ひきこもり型の解離に関する心理教育的支援法の開発—文化的視点に着目して—

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	舩田 亮太	人間関係学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			
研究分担者			
研究分担者			

研究要旨

本研究の着想には、2020 年 2 月からの covid-19 による影響が背景にある。申請者は、人間関係学部着任以降、梶山女学園大学臨床心理相談室の業務に従事し、さまざまな問題を有する児童・生徒・学生の支援を行ってきた。しかし covid-19 の影響により、不登校やひきこもりの事例について対面支援だけでなく、種々のアプリケーションを用いた遠隔支援の重要性が強調されるようになってきた。

一方で、不登校やひきこもり状態にある者に対し遠隔で心理教育を行う際には、自傷、トラウマ、解離などの問題から、心理的安全性の確保が非常に重要となる（舩田,2023）。従って、教育機関では対面型の支援、遠隔型の支援を問わず、今後ますます心理的安全性の確保が重要になるであろう。この教育現場が抱えている課題に向き合うため、日本の文化的要因に配慮した、ひきこもり型の解離に関する心理教育的技法を開発することを目的とする。

研究の結果、1.不登校に関する論考、2.高校生を主な対象とする心理教育教材の英語版・中国語版の試作、以上 2 点を行った。今後はこれらの研究成果を土台とし、本研究課題についてさらに詳細に検討していきたい。

1. 本研究開始の背景や目的等 (600～800 字程度で記述)

本学の教育理念「人間になろう」を達成するには、「自分自身のメンタルヘルスを重要視しながら、他者との関係性も大事にする」という両者のバランスをとることが重要と思われる。それは、心理・福祉・教育・医療といった対人援助職を目指す学生だけでなく、他のキャリアを目指す学生にとっても大切なことであろう。

不登校やひきこもりと併せて検討すべき内容として、自傷の問題がある。自傷は、自殺の危険因子である(松本,2008)。近年発表された生徒指導提要(文部科学省,2022)でも自殺予防教育の重要性は強調されている。自傷の背景には、心的外傷体験(トラウマ)、解離が潜んでいることも多く、教育機関だけで抱えずに医療機関、時には福祉・司法機関とも連携しながら支援を行う必要がある。特に教育機関における自傷対応として、「気づいたら(関連する要因をもつ)友人に連鎖している」という問題にも注意する必要がある。したがって、慎重に個人・環境のアセスメントを行うだけでなく、不登校やひきこもりといった状態に長期的に問題が移行する前に早期介入を行うことが重要となる。

しかし covid-19 の影響により、自宅で療養することの重要性、さらには通学・通勤に対する価値観の変容から、不登校やひきこもりの問題に対して自傷も含めた多角的な検討が必要になった。感染状況が落ち着いてきた現在の学校、教室、自宅学習の状況を含め、日本の学校文化にも対応した心理教育教材を開発する必要がある。近年、DSM-V-TR の苦痛の文化的概念において、ひきこもり(Hikikomori)が記載された (APA,2022 高橋・大野監訳 2023)。従って、今後ますますこれらの支援を検討することが重要になると思われる。

以上から本研究では、「日本独自の文化的要因に配慮した、ひきこもり型の解離に関する心理教育的技法」を研究目的とする。

2. 研究の推進方策 (400 字程度で記述)

目的：心理的安全感と文化的問題に配慮した、ひきこもり型の解離に関する心理教育的支援法の開発

研究 1：文献研究

covid-19 以降の不登校やひきこもりについて、自傷、トラウマ、解離の問題を踏まえながら、心理的安全感を確保した支援のあり方を概観する。

研究 2：心理教育教材の開発研究

自作した「こころが傷つきやすい人に接するときのガイドブック (高校生版)」について、新たに英語版・中国版を試作する。

3. 研究成果（1000 字以上で記述）

研究 1：文献研究

不登校、ひきこもりについては各種資料を含めて、文献収集を行った。そして、舛田・加藤(2024)の病的なひきこもりと非病理的ひきこもりに関する論考を発展させ、「幸せな不登校」が成立する可能性について新たに論考をまとめた。論考では、「幸せな不登校」の前提条件として、人的資源、時間的余裕、予算・制度の問題などの整備が重要であることを指摘した。今後、文化的側面に関する資料収集を積極的に行う予定である。

研究 2：心理教育教材の開発研究

自作した「こころが傷つきやすい人に接するときのガイドブック（高校生版）」について、英語版・中国語版の作成をそれぞれ試みた。手順としては、まず研究協力者の山陽学園大学・上池玲子准教授と協議しながら構成を検討した。次に、自動翻訳ソフトを用いて日本語の文章をそれぞれ英語、中国語（簡体字）に翻訳した。最後に全体の形式面について2名で確認した(図1、図2、図3)。

一方で心理教育教材の内容面について、文化的背景を考慮したイラストや構成を行うことができなかったことが課題として残された。また、中国語に関しては地域に応じた使用の為、繁体字による教材開発も今後必要である。

図 1 日本語版表紙



図 2 英語版表紙

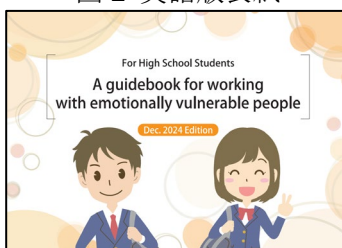


図 3 中国版(簡体字)表紙



4. キーワード（本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載）

① ひきこもり	② 不登校	③トラウマ	④解離
⑤ 心理教育	⑥	⑦	⑧

5. 主な発表論文等（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

・ 研究成果公開予定

舩田亮太（2025）「幸せな不登校」は存在するか？

糸菊 2025 (令和 7 年度版),説苑,p39-42.

令和 7 年 2 月 21 日 相山女学園大学.

・ 今後の研究展望

研究 1 の文献研究に関しては、今後とも国内外の資料を収集し、文化的視点を含めてより詳細に検討していきたい。研究 2 の心理教育教材の開発研究に関しては、言語の問題だけでなく文化的背景を考慮した教材に改訂すること、不登校やひきこもりの内容をどのように表記・追加するかについての検討を今後行う予定である。